

知のパラダイムの変換と小児歯科



九州歯科大学小児歯科学講座

助教授 内上堀 征人

■ 略歴

昭和45年 3月	九州歯科大学歯学部卒業
昭和46年 6月	九州歯科大学歯学部助手
昭和54年 7月	九州歯科大学歯学部講師
昭和60年11月	九州歯科大学歯学部助教授
昭和60年11月	九州歯科学会評議員
	日本小児歯科学会評議員
平成 1年 4月	北九州市小児保健研究会常務理事
平成 3年 6月	北九州市小児口腔保健研究会常務理事
平成10年 6月	日本小児歯科学会常務理事

21世紀まであと442日。新世紀を目前にして、到る所で意識改革が叫ばれている。意識の中心点は知のパラダイムに他ならない。

これまでの古典科学は「機械論パラダイム」を前提とした。ガリレオやニュートン以来の「要素還元主義」が、その基本的方法論で対象を分割し個別に分析すると究極の真理に到達できるとしてきた。しかし21世紀を目前にした現在、地球規模の諸問題（グローバル・プロブレム）と成熟社会の諸問題（フロンティア・プロブレム）という二つの解決困難な問題に直面している。それが明らかにされたのが、「92年の「限界を超えて」（マサチューセッツ工科大学・メドウズ教授）、「72年の「成長の限界」（同：ローマクラブ委託）のレポートでも明らかである。時代は今、「機械論パラダイム」から「生命論パラダイム」へとパラダイム・シフトし、「視点の変換」が次の10項目に集約されている。

(1)「機械論的世界観」から「生命的 worldview」へ (2)「静的構造」から「動的プロセス」へ (3)「設計・制御」から「自己組織化」へ (4)「連続的な進歩」から「不連続の進化」へ (5)「要素還元主義」から「全包括主義」へ (6)「フォーカスの視点」から「エコロジカルな視点」へ (7)「他者としての世界」から「自己を含む世界」へ (8)「制約条件としての世界」から「世界との相互進化」へ (9)「性態・効率による評価」から「意味・価値による評価」へ (10)「言語による知の伝達」から「非言語による知の伝達」へ である。

今回は、(7)の「他者としての世界」から「自己を含む世界」の視点から、ユング心理学の 1)「幼年期」の「安心」、2)「青年期」の「修業の時代」、3)「壮年期」の「奉仕」、4)「老年期」の「希望」の大切さをふまえて、口腔の四段階管理方式を、「21世紀へ向けて小児歯科医療を考える」のテーマについて述べ、「考える」の中心点、知のパラダイムについて、皆様と共に考えてみたい。